

メランヒトン邦訳ノート (1)

菱刈 晃夫

ここではドイツの教師 (Praeceptor Germaniae) と後に尊称されたメランヒトン (Philipp Melancthon, 1497-1560) の原典邦訳 (すべて日本初訳) を少しずつ紹介していきたい。

メランヒトンについて詳しくは、拙著『ルターとメランヒトンの教育思想研究序説』(溪水社、2001年)や同じく拙著『近代教育思想の源流—スピリチュアリティと教育—』(成文堂、2005年)を参照されたい。

ここでの邦訳は、数年後まとまった形で出版予定されている解説を付したメランヒトン主要著作訳のための試訳である。

1. メランヒトンの〔神学〕学士論題 (1519年)

Melancthon's Baccalaureatsthesen.

1518年ヴィッテンベルク大学ギリシア語教授として就任した翌年の1519年9月9日。さらに聖書学〔神学〕学士 (Baccalaureus biblicus) の学位を取得するために提示された討論テーゼ。ルター (Martin Luther, 1483-1546) は1519年10月3日にシュタウピッツ (Johann Staupitz, ca. 1465/70-1524) に宛てた手紙で、「フィリップスのテーゼは、きわめて大胆であるが、とても理性的である」と記している。とりわけ16から18のテーゼは、聖書主義をルター以上に大胆に宣告していて物議をかもしたとされる。

テキスト (ラテン語) としては *Melancthon's Werke in Auswahl* / hrsg. von Robert Stupperich. 7 Bde. in 9 Teilbden. Gütersloh 1951-1975. (MSAと略記) の第1巻24-25頁を用いた。なお近代ドイツ語訳として、*Melancthon deutsch* / hrsg. von Michel Beyer・Stefan Rhein・Günter Wartenberg. 2 Bde. Leipzig 1997. (MDと略記) の第2巻9-11頁を参照した。

* * *

畏れ深き神父・神学部長ペトルス・フォンティヌスが、提示された論題を読み上げる。フィリップ・メランヒトンが答える。

1. 人間の自然本性は自らを自らのゆえに非常に愛する。
2. それは神を自ら愛する能力をもたない。
3. 神の法のみならず自然の法もまた、神は自ら進んで愛されねばならないとする。
4. というのも、わたしたちが奴隷のように神を恐れる原因が法にあるとは思えないから。
5. 人が〔自らを〕おびやかすものを憎むのは当然である。
6. したがって法は、わたしたちにもまた神を嫌うようにさせる。
7. 憎しみが愛のはじまりではないのと同様に、奴隷の恐れが子どもの〔ような畏敬の〕はじまりではない。
8. よって奴隷の恐れが悔い改めのはじまりではない。
9. ゆえに義とはキリストの恵みである。
10. わたしたちのすべての義は、神から無償で贈られたものに帰する。
11. ゆえによい行いが罪であるというのは、完全な真実ではない。
12. 知性は理性や経験を前にして、論題に賛同することは不可能である。
13. 意志もまた自ら確たる根拠なしに、知性を論題に賛同させることはできない。
14. 愛によって対象に結び付けられた意志は知性に、論題に賛同するよう信頼にたる指示を与える。
15. この賛同が信仰、あるいは知恵である。
16. キリスト者にとっては、聖書という証人を除いたもののほかをさらに信じる必要はない。
17. 公会議の権威は聖書の権威よりも下である。
18. ゆえに〔聖職者の失われることのない〕性格や聖体変化やそれに類したことを信じなくても、とうてい異端とはならない。
19. 獲得された信仰とは妄想である。
20. ある1点において罪を犯す者は、すべての点において罪人である。
21. 敵を愛し、復讐をせず、誓わず、すべてのものを共有するのが戒めである。
22. 自然法は魂に生得的な性質である。

23. 自然はただあるよりもよりよくあるように努力する。

24. 神とは個の範疇において1つであり、かつすべての総体である。

2. この世の義しさとキリスト教の義しさの違い (1522 年)

Unterschiedt zwischen weltlicher und Christlicher Fromkeyt.

中世以来の2統治論 (Zweiregimentelehre) を踏襲している。理性の領域 (この世のことがら) と信仰の領域 (神のことがら) とを明確に区別している。とくに子どものしつけ (kinderzucht, Kindererziehung) は、外的なこの世の義しさ [正しい行い] に属するとしている点が興味深い。また人間本性に生来的に植えつけられた理性への一定の信頼なども、メランヒトンをして教育へと原理的に駆動させるモチーフとして重要と思われる。詳しくは前掲拙著を参照されたい。

テキスト (初期新高ドイツ語) としては MSA 1.S.171-175. を用いた。なお MD 2. S.12-16. を参照した。

* * *

聖書には2種類の義しさが記されている。一方は神的な義しさ、他方はこの世的義しさである。パウロはコロサイ人にあててこの世の義しさを「この世の秩序」と呼んでいる。これは、外的な規律や見栄えよさ、態度や礼儀作法、風俗習慣にあって、理性がこれらを把握することができる。そう、この世の秩序とは、木に植えつけられたように、神によって理性に植えつけられている。そこにこうした成果が実るのである。また人間には、誰も傷つけるべきではないとか、みんなと平和を保つべきであるとか、誰に対しても礼儀をわきまえなければならないとかいった分別が植えつけられている。人間の理性が自ら見渡せる範囲が、人間の義しさの及ぶ範囲である。

しかし人間の理性は自ら神について確実に推論することはできない。というのも、たとえ理性が神は存在することを認め、神は裁き、神を敬う者たちを安らかにしようとするのだと聞き及んでいても、理性はその裁きに慄然とするようには振る舞えないから。そして理性は、地獄はそれほど苛酷ではないとか、神はそれほど無慈悲ではないとか錯覚する。なぜなら、非常に大きな不正が—理性が思い描くよ

うに一罰せられないままにしてあるのを理性は見ているから。

理性は、神が罪を赦すということをほとんど理解することができない。理性は、神がわたしたちのことをとても心にかけられているというほどまでに友好的で善き方であるとは思わない。神がわたしたちの大変近くにとともにいらして、あらゆる窮状のなかでもその目をわたしたちに向けておられるといった印象を理性はもたない。むしろ〔理性は〕、神は天国にいてわたしたちができることをそのままにさせているような、そういう神を捏造するのである。ちょうど詩人たちがジュピターを描写するように。つまり、ジュピターをテティスが探したとき、彼は家にはおらず、エチオピアの宿屋にいた²⁾。そしてクレタ島の住人たちは、彼が自分たちのことを聞き取れないようにするために、耳のないジュピターを描いたのだ。これらはまことに賢い人々であった。人間の理性の本性は、正しく見て神を描いた。ちょうど理性が神を表象したように。そこで詩篇のなかで神も語る。「異邦人は目をもてども見ず、耳をもてども聞かない」³⁾。これらに対して、わたしたちを見て聞いてくれる神をもつことが、わたしたちには必要である。

というのも理性は、神がその息子を肉とされ、そのことによって神の意志をはっきりと示し⁴⁾、神についてのわたしたちの盲目とでっちあげの想像を、そうした盲目に従うすべての罪とともに拭い去り、真の神認識に至るために聖霊を注ぎ込まれたということを理解する能力をもたないから。このことに対して、わたしたちの自らのわざも功績も何も助けとはならない。

従ってこれらは、キリストが聖霊とともにわたしたちのなかで作用する神的な義である。わたしたちの心は聖霊によって動かされる。その結果、わたしたちは罪のゆえに神の大きな怒りを前にして震撼し、そしてキリストを通じて恵みと罪の赦しを得られるようになる。すると〔わたしたちの〕心は慰めを受け取り、神に対する確かな喜ばしい心底からの期待を自然にもつようになる。心はあらゆる試練のなかでも進んで神を甘受し、彼から善きものを待ち望むようになる。それは、神がいついかなるときもわたしたちのことを気にかけておられて、わたしたちのまわりのすべての被造物に働きかけておられて、すべてのものを養い、守り、保たれておられることに気づかせる。聖霊がそこにいる場合には、心は神についてこうしたことを確かに推論する。聖霊はこうして、ヨハネ 16 章やローマ 8 章にあるように⁵⁾、わたしたちのなかに神からの証を与えるのである。こうした確実な帰結をパウロはコロサイ人への手紙 2 章において愛と呼んでいる⁶⁾。

このような神認識ならびに信仰こそ、神がすべてに先立って求める、わたしたちのなかの神的な義しさである。ちょうどヨハネ 17 章にいわれているように。「父とキリストを知ることが永遠の命である」⁷⁾。そしてハバククはいう。「義しい人は信仰によって生きる」⁸⁾。そうした信仰は、わたしたちのなかの謙遜な心に作用する。この「へりくだった」心は、イザヤ 53 章にあるごとく⁹⁾、キリストがすべての人間の最底辺となったように、いかにわたしたちがすべての被造物に服すべきであるかを感じる。というのも、何が神の前に正しいものとして値するか、さらにその心が恵みによって贈られたものであることを心が見るとき、もはや自分を抑えきれなくなるから。心は自らを責めなければならず、誰かに従い、誰かに仕えなければならなくなる。そして、聖霊が清いものであると同様に、心もまたけがれのない純粹なものとなる。この心はけがれた欲望と情欲に驚く。そこで神は、エレミヤ 31 章で新しい結びつきを締結しようと語る¹⁰⁾。神の戒めは板ではなく、わたしたちがそれを知るように、わたしたちの心に記してあるのだ。神はイザヤ 45 章で、神を教える子どもたちを作ろうとも語っている¹¹⁾。

ここにあなたは、どのような仕方でもキリスト教的な心が優れているかを見出す。〔キリスト教的な〕心のあるところに神もおられる。その傍らに、外的な義しさあるいは規律があるが、それらがわたしたちを神の前で義しいものとするわけではない。というのも、真の義とは生命であるはずだから。よってキリストの霊だけがわたしたちのなかの生きた義である。外的な秩序は、身体とともに溶け去り生命をもつことはない。ゆえにそれは、コロサイ 2 章にあるように¹²⁾、生命をも義しさをも与えることはできない。従って、そうした外的な義しさだけがあるところには、偽りしかないのである。

外的な義とは、まずは権力のなかに見出される。それを聖書は「剣」と呼んでいる。神がわたしたちに剣を与えられたように、神はまた外的な規律と風紀をも求めておられる。それは、平和を維持するためにこの世の権力に埋め込まれているものだ。そして誰しも、それらが神に対して敵対することを命じない限り、この世の当局に従わなければならない。たとえいずれにせよ暴力を伴う行動に出るとしても。というのもキリストがいうように。「1 マイルいくように強いる者があれば、ともに 2 マイルいきなさい」¹³⁾。

外的な義の 2 つめのものとは、神から命じられた子どものしつけ〔教育〕である。それを人はパイデアと呼んでいる。これは決して神的な義というわけではないが、1 つの外的な訓練であって、子どもたちを重大な罪から守るために両親に神が命じ

ておられるものである。ガラテヤ4章にあるように¹⁴⁾、子どもや愚かな人々を、断食や祈りや教会へいくことや、きちんとした服装をして出かけることに慣れさせるといったように。剣が命じていないことを神は自由にしておられる。だが、人はそこでなおも愛に仕えるべきである。たとえば、子どもや弱々しい良心のところでは、彼らの弱さに奉仕すべきである。

しかし今や説教者がやって来て、神的な義が断食やそうした事柄のなかにあるなどと偽りをいう場合には、あるいはあたかもそうした事柄に全キリスト教徒〔の存立〕がかかっているかのように、この世の当局が強制する場合には、わたしたちは抵抗し、そして何がキリスト教的な義しさであるかを告白し、そのために自らの生命を投げ出さなければならない。なぜなら、わたしたちは暴力でもって逆らうべきではないから。

十戒にはこうしたすべてのことが含まれている。というのも、第1は信仰を要請し、そのなかで神が語る。「わたしは神であり、あなたの主である」¹⁵⁾。神がわたしたちの主であるというのだから、神はわたしたちと関わりあうことを欲しておられるのである。同様に「わたしは強い熱情であり、父祖の罪をとがめ慈しみを与える」¹⁶⁾。そして神は、罰しようが助けようが、わたしたちが自ら神の方に向かうことを望んでいるのである。

2つめの戒めは、人が神の名をそのために用い、ヨエル2章に「神の名を呼び求める者は救われる」と記されてある通り¹⁷⁾、神が援助者であり裁き主であるよう賞賛している。

第3の戒めは、神のみがわたしたちの内で働くよう命じている。

第4の戒めは、わたしたちを良心とその権力の下に投げ入れている。

第5の戒めは、愛を命じ、

第6の戒めは、純潔を、

第8の戒めは¹⁸⁾、愛を。

第9と10の戒めは、すべての肉欲の欲望から離れた純粋な心を求めている。そうした純粋性を聖霊は自らとともにもたらすのである。

(注)

1) 「コロサイ人への手紙」2章8節。

2) ホメロス『イリアス』1、413-427。

3) 「詩篇」115章4節以下、135章13節以下。

- 4) 「ヨハネによる福音書」1章14節。
- 5) 「ヨハネによる福音書」16章13節。「ローマ人への手紙」8章16節。
- 6) 「コロサイ人への手紙」2章2節。
- 7) 「ヨハネによる福音書」17章3節。
- 8) 「ハバク書」2章4節。
- 9) 「イザヤ書」53章3節。
- 10) 「エレミヤ書」31章31-33節。
- 11) 「イザヤ書」44章3-5節参照。
- 12) 「コロサイ人への手紙」2章23節。
- 13) 「マタイによる福音書」5章41節。
- 14) 「ガラテヤ人への手紙」4章3節。
- 15) 「出エジプト記」20章2節。
- 16) 「出エジプト記」20章5節以下。
- 17) 「ヨエル書」2章12-27節参照。
- 18) 第7の戒めについての言及が欠けている。